大分県の礫石経

渋谷忠章

一　はじめに

開発に伴う発掘調査は、これまで調査の対象としてきた遺跡の種類・時代から、中世はもとより近世・近代の遺跡もその対象とする自治体が増えてきた。そのことに対する問題や課題は、必ずしもないわけではないが、調査対象の拡大はこれまで史料でしか知ることの出来なかった大分県の近世・近代の遺跡の状況をより明らかにし、その成果にははかり知れないものがある。

昭和六十一年、九州横断自動車道の建設に伴い調査した大分県女狐（めぼる）近世墓地は、享保から明治年間にいたる墓地の変遷を明らかにし、近世墓の調査・研究には欠かせないものとなっており、以後、県内の各地で近世墓の調査が行われるようになった。また、大分県共同庁舎の建設で行われた府内城下町関連遺跡の発掘調査は、大分県における城下町遺跡の先駆的なものであり、その後、大分合同新聞社屋、大分中央警察署、若草公園等の建設においても実施され、これまで絵図等でしか知られなかった府内城下の様相が現実的なものとして明らかになった。

小稿の礫石経も、過去には出土の伝えがあるものの、それは偶然に発見されたものであり、考古学的な調査例はほとんどないのが現状である。しかし近年の発掘調査では、全国的に礫石経の調査例が増え注目されるようになり、県内でも最近数例が調査された。もちろんこの中には、報告書の刊行に至っていないものもあり、その調査例もごく一部であるため、県下の礫石

経の様相を明らかにするには至らないものであるが、礫石経の現状と若干の課題について触れてみたい。

二　礫石経研究小史

礫石経は多くの場合、中世や近世の塚または墳墓などに埋納され、古くから埋経の塚（一字一石経塚、礫石経塚）として認識されてきた。明治三十五年和田千吉氏は[1]、埋納された経文の種類と一石経の概念を明らかにし、一字一石経を経塚としての概念で捉えることを示した。その基本的概念は、その後、石田茂作氏に引き継がれ、氏は「一石経は藤原期の埋経と同一視できないものであり、その起源については笠塔婆や柿経などに求められ、追善を目的として行われた功徳業の一形式[2]」として位置づけられた。

石田氏以後の礫石経（一石経）の研究は、いずれも石田氏の研究を補うもので、大きく展開することのないままに終始した。しかし近年の礫石経出土遺跡の増加により、末法の時代に造られた「経塚」と同一視出来ないことが考古学的にも指摘されるようになり、坂詰秀一氏は「礫石経」の実態分析は、中世後半の埋経・納経のあり方ともども注目すべき課題であることを指摘するなど、新たな中・近世の経塚研究の方向性を示された[3]。また、平成二年には、関秀夫氏により古代から近世に至る経塚がまとめられ[4]、平成六年には立正大学考古学研究室により、全国の礫石経の地域相が示された[5]。

九州の礫石経については、森本一瑞の『肥後国誌』（安永元年・一七七二）に、「此辺妖狐栖ミテ往来ノ男女ヲ悩ス事多キ故ニ、中央山妙法寺ノ住侶石字法華経ヲ書写シテ、土中ニ納メ、此塔ヲ建テ柊ノ木ヲ植ショリ、妖狐ノ災ナシ」と熊本県松橋町近くの街道筋の経塚について触れている。また、小倉藩士の国学者西田直養（一七九三～一八六五年）の『柳村筆記』には、「城西愛宕山にたてる経塚といへるに、謹奉読誦法華妙典一千部為玉室興公禅定門時干元亀三年閏正月廿五日展供養成就者也とあり、このところ家の傍より小石に文字かきたるもの出づ」とあり、北九州市愛宕山において、元亀三年（一五七二）銘の経碑の近くより礫石経の出土したことが報じられている。

しかし、九州での礫石経が学術的に取り上げられたのは昭和になってからであり、昭和九年、武藤直治・竹岡勝也氏は高良山経塚発見の礫石経について触れ、翌年には武藤氏が高良山発見の礫石経が江戸時代のものであると考察[7]している。また、乙益重隆氏は熊本市藤崎台球場の工事中発見された礫石経について、礫石経の納められた容器の甕や遺跡近くの経蔵が元禄二年（一六八九）に建立されていることから、礫石経をその年代に推定し、さらに熊本市健軍町発見の礫石経は、木箱のようなものに納められていたことを推察している[8]。

元来、九州は太宰府や山岳仏教の求菩提山をはじめ国東六郷山などを中心に多数の経筒が発見され、経塚の研究はこうした平安時代の経筒等が中心になって行われ、礫石経は対象外の取り扱いがされてきたと言っても過言ではない。そうした中で、昭和五〇年「宮崎の経塚地名表」[9]では十一遺跡の礫石経出土地が示され、また、「九州経塚分布地名表」[10]では、礫石経経塚が今後相当数増加するであろうことを指摘している。さらに佐賀県では、志佐憚彦氏が佐賀県内の礫石経及び一字一石塔所在地名表に約一四〇ヶ所を示し、経石埋納の場所、埋置の状況、経典の種類、埋経の年代等について考察[11]している。礫石経、一字一石塔の実態を県下全域でまとめたもので、数少ない礫石経の研究として注目される。

さて、大分県の礫石経も例外でなく、経塚の研究は経筒を中心に行われ、現在、紀年銘入りの経筒等は二九件、紀年銘の無いものが十六件、実態は把握されていないが文献や伝承のあるもの八件が知られ[12]、そのうち紀年銘最古である山香町津波戸山経塚出土の銅経筒は、永保三年（一〇八三）の銘があり、江戸時代に発見され国の重要文化財に指定されている。

こうした中で、朝地町上尾塚石幢は、銘文から礫石に書写す行為を確認できる最も古い例として早くから経塚研究のうえで注目されてきた。しかしその他については、わずかに経碑が市町村誌等に紹介されるにとどまり、一字一石塔を含めどれだけの数の礫石経が存在するのか、ほとんど見当がされない。最近の礫石経経塚の調査例は、こうした礫石経経塚の実態解明の契機となるものであり、近世庶民の宗教生活を理解する上で注目されるものである。

三　経塚と礫石経

経塚とは、書写した仏教経典を土中に埋納した遺跡のことである。平安時代に流行した末法思想を背景に、仏法の衰滅を恐れて経典を書写し、仏滅後五六億七千万年の弥勒菩薩再生の時まで、地下に埋納し保存しようとしたものである。最古の例は、藤原道長が寛弘四年(一〇〇七)に奈良県吉野の金峰山山頂に埋納したもので、金銅製の経筒に経典が納められた。平安時代の経典は、紙に書写された紙本経が一般的で、銅製の筒や陶製の壺等に納められたが、紙本経の他に瓦経、銅経、礫石経、その他などがある。

瓦経は、粘土板に箆などで経典を書写して焼きあげたもので、経典を永く後世に伝えようとしたものと思われるが、実際には多く造営されることなく、その時期も十一～十二世紀に限られている。経典は法華経が最も多いが、紙本経にほとんど見られない大日経・金剛頂経・蘇悉地経・薬師経・不動経などがある。

銅板経は、銅板の両面に経典を刻んだもので、瓦経と同様の意図があったものと思われる。しかしその発見例はさらに少なく、福岡県豊前市求菩提山普賢窟、大分県豊後高田市長安寺、奈良県吉野郡金峯山経塚出土のものが、年代のはっきりしたものとして知られている。このうち長安寺銅板経は、寺の背後より発見されたといわれ、銅板経一九枚、銅板経を入れていた銅筥板四枚からなる。銅板は両面に二八行にわたり法華経が刻まれているが、経文から本来は三七枚あったとされている。また、筥板も本来は六枚と考えられるが、現存の筥板には如意輪観音半迦像、十一面の観音立像など六観音像と銘文や種子が毛彫りされている。銘文から保延七年(一一四一)に書写されたことがわかり、国重要文化財に指定されている。

礫石経は、経典を小石に書写したもので、一石に一字づつ書写したものが多いことから一字一石経と呼ばれている。石は二～五センチほどの扁平な川原石が多く用いられているが、山石や一〇センチを越える石が使用されることもある。また、宮崎県清武町山内石塔群[13]では扁平な石の片面に「南無阿弥陀佛」、北九州市力丸遺跡[14]からは「比法華経記」と一石の全面にわたっ

て書かれたものもあり、他に一石二字、一石三字などもある。礫石経は中世から近世、特に江戸時代に集中している。

その他には、滑石経、青石経、貝殻経などがある。滑石経は滑石に経典を刻んだもので、福岡県下出土と伝えるものが十数枚遺存している。経典は法華経で、一行十八～二一字を上面、下面、小口面にも書写している。青石経は、経典を緑泥片岩に刻んだもので愛媛県北条市より、貝殻経は山口県防府市阿弥陀寺等で出土しているが、いずれも発見例は少ない。

四　大分県の礫石経

大分県の礫石経は、暦応二年(一三三九)在銘の朝地町上尾塚八角石幢(八面に板碑を表現した特異な形式)に、「浄土三部経一石一字」と刻まれており、経典を一石に一字づつ書写した最古の例であることは、これまで述べてきたとおりである。しかし埋納したという記述がないことと、地下遺構の調査が行われていないための不安はあったが、今年度石幢の保存修理が予定されており、場合によっては地下遺構の状況が解明される可能性がある。その他にも、経碑の銘文から礫石経を埋納したと考えられる経塚は多数存在するが、ここでは最近の発掘調査で地下遺構の明らかになった経塚をいくつか紹介してみよう。

女狐近世墓地[15](大分市高崎)

享保～明治年間にかけての墓地で、累代墓が成立する以前の景観を非常によく残している。墓は一三九墓を数え、その内訳は成人墓四九墓、幼児墓五三基、性別年令不明墓七基からなり、他に墓の付属施設として石幢一基、六地蔵と棺台各一基、一字一石塔二基、供養塔一基、石燈篭一基等が存在する。

三号一字一石塔は、宝珠・笠部・本体・蓮華座・台石二段からなる。笠部正面は唐破風が造形され青彩がある。本体正面に「大乗妙典塔　一石一字書写　三千部読誦」、右側面に「宝暦三癸酉年」、左側面に「当院二世　仲春如意日　宝珠院元法院建立之」と刻まれている。石塔下部に長軸一〇〇センチ、短軸八〇センチ、深さ一〇〇センチの土坑があり、墨書された約五センチ大の経石が充満していた。読めた文字は、巳・諸・供・來・除・不・傅・所・十・就・喜・有などがある。一七五三年、

高見家二代目僧侶の建立である。

六七号一字一石塔は、本体正面に「一石一字　大乗妙典」、左側面に「天明四申辰歳」、左側面に「十月廿八日　願主慈覚院三世」とある。石塔下部には、長軸一二〇センチ、短軸一〇〇センチ、深さ七五センチの長方形土坑があり、土坑内に経石が充満していた。三号と同じく五センチ大の石に経文が墨書され、読めた字は念・渇をはじめ五二字にのぼる。また副納品として土坑内より寛永通宝が出土。一七八四年、慈覚院三世が建立したもので、高見家三代目僧侶にあたる。

二本木礫石経経塚[16](大野町大字大原)

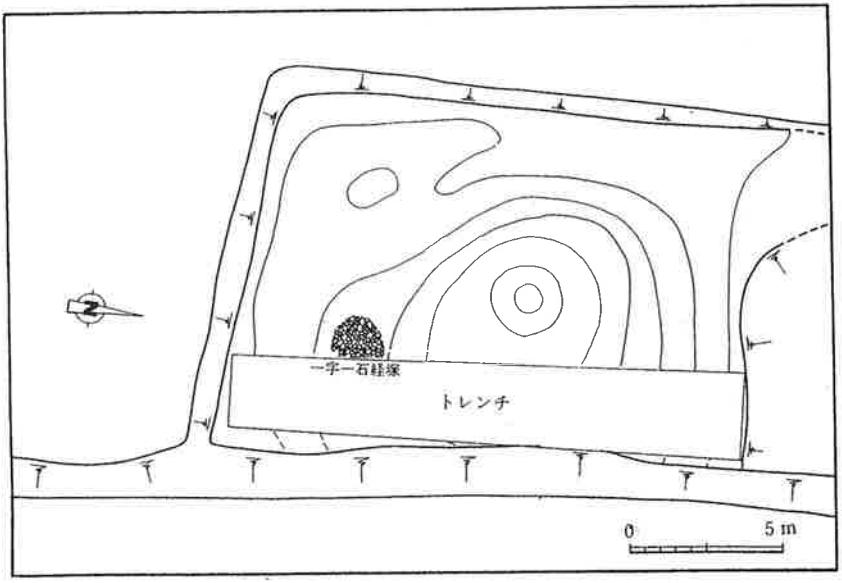
県道緒方～大野線沿いにある。弥生～古墳時代の集落跡である二本木遺跡内にも含まれ、また近世岡藩の茶屋場跡としても知られている。平成九年、道路改良工事に伴い調査された。

経塚は、南北三メートル、東西一〇メートルの隅丸方形状を呈し、高さ一、二メートルを測る。礫石経はその中央部でなく、南側裾部の径一〇〇センチ、深さ三〇センチの竪穴に充満した状態で発見された。経石の総数は四八一九四個を数え、判読可能な経石は八二一個である。このうち一点には、弥生土器片を転用したものが認められている。副納品として土坑内より寛永通宝(第Ⅲ期)が出土し、築造は一六七九年以降の年代が考えられ、経典は経石の数等から法華経である。

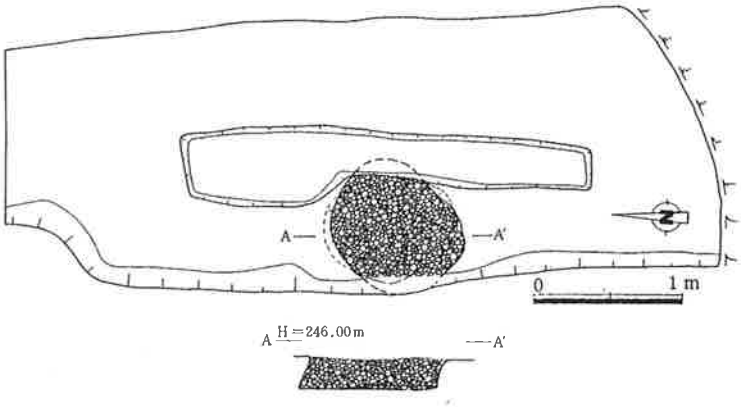
その他は、まだ報告書が刊行されておらず整理作業も十分に行われていないが、大分市宮川内浄土寺一字一石経、大分市横尾尾崎一字一石塔の発掘調査が行われている。

浄土寺一字一石塔[17]は、「金光明最勝王経書写塔」と刻まれ、その下部の径約一〇〇センチ、深さ七〇センチの隅丸方形の土坑より経石が充満した状態で発見された。経石は数万個に達するという。経碑には年代が刻まれていないが、近くの神燈に天明二年(一七八二)の銘があり、礫石経もその年代が考えられている。

尾崎一字一石塔[18]は、通称「ムシヅカ」と呼ばれ、旧尾崎村の村はずれのこの場所まで虫送りをしていたという。経碑正面に「大乗妙典一字一石」、右側面に「文政二卯三月日」と刻まれ、一四〇センチ×一二〇センチの基壇に経碑が建てられている。



第１図　二本木経塚平面図(文献16より)



第２図　二本木経塚土坑平・断面図(文献16より)

三回に及ぶ埋経行為が確認されている。

五　礫石経のはじまりと展開

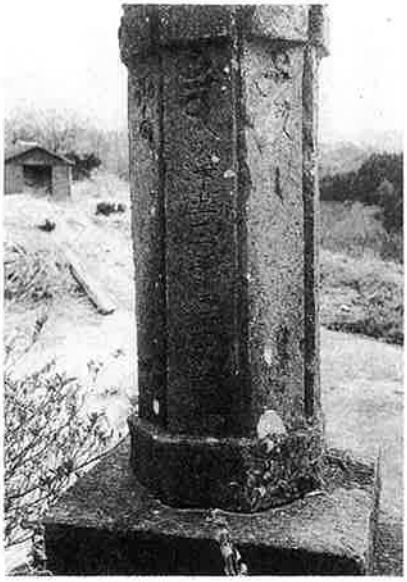
平成四年十月四日、国東町の曹洞宗泉福寺で、開祖無着禅師の没後六〇〇年を記念して本堂の建てかえが行われた。その際、檀家衆が般若心経二六二文字を一字一石に書写し、布袋等に入れ須弥壇の下に埋納したと言う。礫石経埋納の最も新しい例であるが、経石は出来るだけ形のいいものを選んだそうである。

十世紀後半に近畿地方にはじめられた経典埋納行為は、その後、各地に波及していった。その波及の仕方は一様ではないが、九州では佐賀県小城郡岩蔵寺より治暦二年(一〇六六)、福岡市香椎宮から承暦三年(一〇七九)、山香町津波戸水月寺跡から永保三年(一〇八三)銘の経筒が発見されており、十一世紀後半には経典を埋納する行為が行われている。そして十二世紀前半には、康和四年(一一〇二)銘の三光村山ノ下経塚、永久三年銘(一一一五)の緒方町三宮八幡社経塚出土の経筒をはじめ、大分県を含め北九州一帯には多数の経筒が波及し、一時的にその数は近畿地方をしのぐものとなる。

十二世紀後半から十三世紀代になると経筒は減少傾向にあり、県内も数例が知られる程度となるが、この頃になると国東半島には国東塔が出現する。国東町岩戸寺国東塔(弘安六年・一二八三)に「如法経奉納石塔一基」、国見町伊美別宮社国東塔(正応三年・一二九〇)は「奉納如法経三部」、武蔵町照恩寺国東塔(正和五年・一三一六)に「奉納如法経一乗妙法蓮花経」などと刻まれ、国東半島一帯には納経を目的とした国東塔が出現し、経典埋納行為は依然と続けられるが、さらに室町時代後期以後は礫石経の埋納が主となり、江戸時代にその全盛をむかえるのである。

さて、礫石経による埋納行為を示す朝地町上尾塚八面石幢は、暦応二年(一三三九)に浄土三部経の一字一石の書写とともに、「奉読誦法華経三十三部」、「□□□光明真言万三千」、「奉書写法華経七部」が行われている。地下遺構の状況は明らかになっていないが、三重県上野市白樫慈尊寺の小堂内にある板碑にも「古相当悲母尼妙阿三忌辰　書写一石面一乗妙典一部　十

朝地町上尾塚八面石幢（遠景）



朝地町上尾塚八面石幢（近景）

行心経一字一碁八万四千石塔造立□□、専祈得脱乃至法界平等利益矣　元亨元辛酉十二日八日敬白」[19]とあり、元亨元年（一三二一）には礫石経の埋納が行われていたことは間違いないようである。

十五世紀代では、三重町白谷宝篋印塔に、「奉造立供養　宝篋院塔一基　勝山高公禅定門并大乗妙典一字　一石全部此以功徳頓証菩提連到　涅槃迫者也」　「信心施主藤原朝臣衛藤家通　皆延徳〻歳壬子二月吉日　孝子敬白」とあり、延徳四年（一四九二）衛藤家通が父の勝山高公供養のため建立したものである。

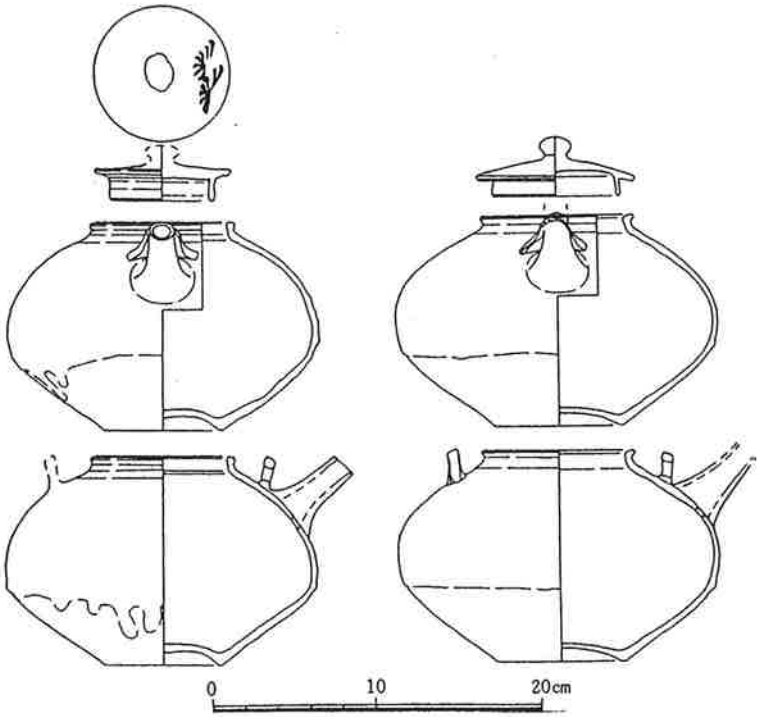
十六世紀代では、宇佐市任聖寺の地蔵石仏に「法華千部□塔同一字一石□永正八辛末二月日」とあり、鹿児島県開聞町上野神社経碑には「理趣品一部　奉書写一字一石　大永乙酉十一月廿二日」と刻まれている。また、熊本市神宮寺境内の経碑には「謹奉書写大乗妙典一字一石……略……天文十五丙三月吉日」とあり、九州全域に一字一石経書写が広がりをみせ、庶民の間にも定着する傾向にあり、十七世紀以後は爆発的な広がりを示し、最も盛んなのが十七世紀末頃から十九世紀中頃までで、その後は減少するのである。

六　礫石経の分布と埋地状況

礫石経の埋納と、その埋納を伝える経碑は各地に分布するが、これらの研究は地域的な精粗があり、全容を示すまでに至らない。古代の経塚は、社寺と密接に関係し埋納されたことが明らかであるが、礫石経もかつては一字一石経塚として捉えられてきた。しかし近年の報告例では、塚以外に埋納される例も多数あり、大きくは(1)寺院境内　(2)墓地　(3)神社関係　(4)田畑・村落などを一望できる丘陵あるいは微高地上　(5)街道筋、辻、岬など交通の要所　(6)古墳丘陵あるいはその近傍などに分けられる。[20] このように埋納地が様々であることは、願意の一端を示していたものと考えられるが、特に近世遺構の経碑を伴う礫石経はいたる所に見られ、埋納場所だけでその多くを明らかにすることは難しい。

大野町二本木出土の礫石経は、塚の南側から発見され経塚と呼ばれるものであるが、その場所は竹田～朝地～大野～緒方へ通じる街道沿いにあり、その後は岡藩の茶屋場となった場所である。また、朝地町上尾塚八面石幢は、磨崖仏で知られる普光寺へ通じる道筋にあり、周辺がかなり削平されているものの、本来は塚状を呈していたように思える。願意は旅の安全等であったと思われるが、熊本県松橋町街道筋経塚例のように、「此辺妖狐栖ミテ往来の男女ヲ悩ス事多キ故ニ…」築造されることもあったのである。大分市尾崎一字一石塔は、旧尾崎村のはずれにあたり、村の安全、五穀豊穣等を目的としたであろうが、村の出入口の道筋にもあたる。その他、大分市女狐一字一石塔は墓地に築造されたものであり、宇佐市任聖寺は寺院に関するものである。寺院の場合、国東町泉福寺例のように、建物等に伴い埋納されるが、神社関係では鳥居の下に埋納された例もある。県内では発見例はないが、佐賀県神崎町忠五郎山古墳では主体部の横穴式石室から、前方後円墳の同町伊勢塚古墳は後円部羨道入口付近より礫石経の出土があり、礫石経は比較的人目にふれやすい場所での発見が多いようである。[21]

次に礫石経の埋納状況は隅丸方形を呈した土坑に直接納められるのが一般的で、県内はほとんどがその例である。最近の泉福寺例では布袋に入れて礫石経を納めたが、それは二六二文字の般若心経であったからであろう。しかしこうした例も少なく、



第３図　冨泉院出土土瓶実測図（文献11より）

熊本市藤崎台は直径八六センチ、高さ六九センチの大型甕に埋納されたことが明らかで、その甕は補修痕があることから他に使用されていたものが転用されたものである。また、佐賀市冨泉院境内例は、褐釉のかかった味噌甕風広口小型甕四個と、青緑色の釉薬のかかった陶製土瓶二個に納められていたが、熊本市健軍町例は木箱に納められた可能性が指摘されている。

その他、墳墓に直接伴う例として、伊万里市中野家墓地では一辺一・五メートル、深さ二メートルの土壙に遺体を納めた大甕の棺を据え置き、その甕の蓋から地表近くまで礫石経が充満しており、佐賀県多久市西ノ原等覚寺は、地山に土坑を穿ち、基底面に台石を据えその上に青白磁の骨蔵器が甕に入れられていた。その甕と骨蔵器の隙間や甕の周囲にも礫石経が充塡されていたという。銘文には祖父への追善と、子孫繁茂、武運長久の願意が刻まれていたという。

七　礫石経の書写と経典の種類

礫石経は一字一石経と呼ばれるように、経文を一石に一字ずつ墨書きしたものが一般的であるが、佐賀市冨泉院出土の経石は、一辺一・三センチ、厚さ〇・五センチの小さなタイル状をした磁器で、経文を書写した後に焼成したものである。また、大野町二本木経塚からは弥生土器片を転用したのが認められたが、他にも鹿児島県川内市風口遺跡[22]や福岡市諸岡遺跡[33]出土の礫石経にも確認されている。さらに銀杏の葉に書写することもあり、多数の人間の参加による多量の写経供養をする場合などに用いられている。

次に経塚から発見される経典の種類は、紙本経の場合はそのものが失われても経筒やその外容器の銘文から知ることができ、各時代を通じて最も多いのが法華経であり、平安時代のものはまず法華経である。鎌倉時代には浄土三部経の如法書写が行われた例もあるが遺品の上では法華経が圧倒的に多い。朝地町上尾塚八面石幢は、この浄土三部経の一字一石書写を示す例としても注目されるのである。また、室町時代以降になると、法華経を「大乗妙典」あるいは「経王」などと経筒に記す傾向がある。

さて、礫石経に書写された経典は、前述したように上尾塚八面石幢に浄土三部経（無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経）を書写したことが刻まれているが、江戸時代の経碑のほとんどは大乗妙典と刻まれている。他に「法華妙典」、「妙法蓮華経」も見られるが、いずれも法華経であり「妙法蓮華経」を略したのが法華経である。

また、法華経は「如法経」と呼ばれるが、「妙法経」の名称は、法華経を如法清浄に書写することとして通用されている用語で、この用語の起源からすれば必ずしも法華経の浄写に限られるものではなく、法華以外の経にも「如法経」の名称がつけられている。はじめのうちは如法経とは法にかなって書いた経という意味の用語であったが、如法経は法華経の清浄写経であるとするようになるのは、如法経が埋経と結合して普及するようになったからで、しだいに「如法経」は法華経を如法浄潔に

書写した用語として通用するようになる。[24]

法華経の他には、陀羅尼経、全剛経、観音経、薬師経、金光明経、理趣経などの埋経がみられ、沖縄県では伊江村の照太寺に建っていたといわれる経碑に「金剛尊経」とあり、国頭村奥間に金剛山碑、浦添市経塚に金剛嶺碑があるなど、金剛経の経碑がみられる。[25] また、熊本県では県内に分布する芥川守拙の碑に、いずれも「普門品一字一石　寛政申寅七月」とあり、信仰に篤い芥川守拙が五穀豊熟・人民平安・罪障の消滅と子孫の繁昌を祈り、観音経を埋納している。[26]

経典の種類は、こうした経碑に記された銘文によって知ることが出来るが、経塚や経碑がなく発掘調査や工事中に偶然発見された場合にも、遺物や遺構からある程度判断することが可能である。北九州市力丸遺跡の経塚では、礫石に経題を記したが、こうした例は稀で、法華経の字数が総数で約七万字になることから、これを一石に一字ずつ書写すれば約七万個の経石が必要となる。久留米市高良山では六万個以上、福岡市諸岡遺跡経塚は約六七、五〇〇個、直方市藺牟田三号経塚[27]では約七万個の経石が出土したという。大分県の場合でも、二本木経塚が四八一九四個を数え法華経の埋経と判断されるが、大乗妙典と刻まれた大分市尾崎や女狐一字一石経碑の下部からは数万個の経石の出土があったと言う。

八　埋経の目的と副納品

平安時代の中期、ほぼ十世紀の終わりごろはじめられた経典埋納は、中世以降になるとその目的は大きく変化し、追善供養や現世利益に関するものが多くなり、「天下太平　国土安穏」、「現世安穏　後世善処」、「子孫繁昌」、「十方至聖　三界万霊」、「五穀成熟　人民平安」、「武運長久　家内繁栄」、「無病息災」等といった願文が記されるようになり、末法思想を背景に仏法の衰退を恐れて造られた「経塚」とは大きく異なるのである。つまり初期の経塚築造は末法の世を嘆き、「現世安穏　息災延命」、「上品下生　極楽浄土」などを願い、個人の信仰が埋納行為に反映されたものであったが、末法観の薄れる中世以降は積善業、功徳業、勧進業として様々な形で行われ、埋納経塚も経供養の一形態として残った。しかし近世におい

ては、経碑の銘文からも明らかになったように、礫石経の書写供養は多数作善を容易にし、地域における寺院を媒介として地域内の民衆間に取り入れられたのである。

経塚の中で副納品の種類や量が多いのは紙本経の場合で、鏡、利器、合子、銭貨、仏像、仏具、図像類等があるが、礫石経の副納品は少なくたまたま検出されたものに鏡、利器、貨銭、香炉、懸仏などがあるが、まったくなかった例の方が多い。また九州でも調査例が少ないこともあって、発見例は僅かである。その中で耶馬渓町栃野から短刀の出土が伝えられているが詳細は不明である。その他は貨銭の出土で、直方市藺牟田一号経塚で「嘉祐通宝」一枚、鹿児島県風口遺跡経塚で「洪武通宝」一枚、久留米市高良山経塚、大分市女狐六七号、二本木経塚で「寛永通宝」がそれぞれ一枚発見されている程度である。調査例に関係なく、礫石経経塚に副納品を伴うことは当初から少なかったようである。[28]

九　おわりに

以上、最近調査された県内の礫石経を出土する遺跡と、若干の九州内の遺跡について触れたが、特に県内では調査例が少なくまとめにまでは至らなかった。しかし礫石経経碑は各地に存在しており、経碑研究の中で進めていくことは可能である。そのためにも、地域ごとの悉皆調査が必要となる。特に礫石経経碑には、自然石を若干加工したものや、女狐一字一石塔のような宝珠・笠部・本体・蓮華座・台石からなり、笠部正面は唐破風が造形されたものの他に、米水津村色利浦中ノ鼻宝篋印塔、香々地町山王社宝篋印塔、三重町白谷宝篋印塔は礫石経経碑であり、銘文を含めた一連の作業の中で進めていくことが大事である。また、今後の発掘調査でも礫石経の調査例の増すことが期待され、この両者が補完することによって近世庶民の宗教生活がより解明されるように思える。

参考文献

（1）和田千吉「経文埋没の種類と其主意」（『考古界』一―八　明治三五年）
（2）石田茂作「経塚」（『考古学講座』第二〇・二四・三三巻　昭和四・五年）
（3）坂詰秀一「経塚の調査」（『歴史公論』十　昭和五一年）同「礫石経研究の展望」（『礫石経の世界』立正大学文学部考古学研究室編　平成六年）
（4）関秀夫『経塚の様相とその展開』（平成二年）
（5）立正大学考古学研究室編『礫石経の世界』（平成六年）
（6）武藤直治・竹岡勝也「高来山経塚発見の一字一石経・西油山天福寺跡」（『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第九輯　昭和九年）
（7）武藤直治「高良山中再発見の一字一石経」（『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十輯　昭和一〇年）
（8）乙益重隆「藤崎台の沿革―埋納経石」（『熊本県文化財調査報告』第二集　昭和三六年）
（9）茂山　護「宮崎の経塚地名表」（『宮崎県総合博物館研究紀要』3　昭和五〇年）
（10）宮小路賀宏・杉山　洋「九州経塚地名表」（『考古学ジャーナル』No.一五三　昭和五三年）
（11）志佐憚彦「佐賀県下の礫石経について」（『佐賀県立博物館調査研究書』8　昭和五七年）
（12）栗田勝弘「大分県の経塚と勧進僧の動態」「『古文化談叢』第四〇集　平成一〇年）
（13）宮崎県教育委員会「山内石塔群」（『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第一集　昭和五九年）
（14）北九州市教育委員会「力丸遺跡（『北九州市文化財調査報告書』第二十六集　昭和五三年）
（15）大分県教育委員会「女狐近世墓地」（『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』(5)　平成八年）
（16）大分県教育委員会「二本木遺跡」（『県道緒方大野線道路改良事業に伴う発掘調査』　平成一〇年）
（17）平成九年、県道改良事業に伴い大分県教育委員会が調査。

(18) 平成八年、東九州自動車道建設に伴い大分県教育委員会が調査。
(19) 伊東市教育委員会『妙隆寺遺跡発掘調査報告書』(昭和六三年)
(20) 松原典明「礫石経研究序説」(『礫石経の世界』立正大学考古学研究室編、平成六年)
(21) 注(11)に同じ
(22) 河野治雄「風口遺跡」(『日本考古学年報』26　昭和四八年)
(23) 福岡市教育委員会「諸岡遺跡」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第一〇八集　昭和五八年)
(24) 兜木正亨「如法経と経塚」(『新版仏教考古学講座』第六巻　昭和五二年)
(25) 沖縄県教育委員会「金石文」(『歴史資料調査報告書』V　昭和六〇年)
(26) 熊本市教育委員会『熊本市東部地区文化財調査報告書』(昭和四八年)
(27) 直方市教育委員会「蘭牟田遺跡」(『直方市文化財調査報告書』第七集　昭和五九年)
(28) 三宅敏之「経塚の遺物」(『新版仏教考古学講座』第六巻　昭和五二年)

(大分県教育庁文化課主幹)